

陸機の兄弟について

一 はじめに

西晋の陸機には、三人の兄と二人の弟がいた。すなわち汪藻の『世説叙録』にある「呉郡陸氏譜」には、次のようにある。

【四世】

晏、抗子。呉裨將軍、夷道監。為王濬所誅。

景、抗子。字士仁。騎都尉、毗陵侯、偏將軍。為王

濬所誅。

玄、抗子。

機、抗子。字士衡。吳牙門將、晋平原内史、行後將

軍、河北大都督。為成都王穎所害。年四十三。

雲、抗子。字士龍。晋吳王郎中令、清河内史、大將

軍右司馬。為成都王穎所害。年四十二。

耽、抗子。平東祭酒。為成都王穎所害。

これに拠って、陸機には「晏・景・玄」という三人の兄

佐藤利行

と、「雲・耽」という二人の弟がいることが分かる。これらの事は、『三国志』『晋書』等の史書に拠っても知ることのできることである。しかし、二陸と称された陸機・陸雲との詳しい関係は、雲が機に宛てた「與平原書」等の資料によってその詳細を知ることができるのに比べ、陸機と三人の兄、末弟耽との関係については、尚お不明な点も多い。また、陸機には此の五人の兄弟の他に、実は一人の姉がいた。

以下、小論では陸機とその兄弟との関係について、新出の資料を紹介しながら考察を加えることにする。

二 陸機の姉について

陸機の姉については、夙に姜亮夫氏の『陸平原年譜』に指摘があり、それに拠れば陸機の姉は顧謙なる人物と結婚していた。すなわち、『宋書』卷八十一の顧覲之伝に、

顧覬之、字偉仁。吳郡吳人也。高祖謙、字公讓。晉平原内史陸機姉夫。祖崇。大司農。顧覬之、字は偉仁。吳郡・吳の人なり。高祖は謙、字は公讓。晉の平原内史 陸機の姉の夫なり。祖は崇。大司農たり。

とある。高橋和巳氏は「陸機の伝記とその文学」(『中国文学報』第十一・十二冊)の注に示す陸氏系図で、陸機に姉がいて、顧謙なる人物に嫁いでいたことを指摘されているが、これも此の指摘に拠るものと思われる。

ところで、近年発見された『文選』集注本残卷(天津市芸術博物館蔵)は、『京都帝国大学文学部景印舊鈔本』第九集に収める文選集注本卷四十八上と卷四十八下残一葉とのちようと間に当たる部分で、ここには陸機の詩が収められている。その「贈尚書郎顧彦先二首」の題下の注に次のようにある。

李善曰、王隱晋書曰、顧榮、字彦先、吳人也。為尚書郎。鈔曰、機從洗馬為吳王郎中令、從郎中又為尚書郎。彦先亦為尚書郎、同在楚省別院。榮復是機姉夫。于時遇雨不得相見、相憶作此詩。

李善曰く、王隱の『晋書』に曰く、顧榮、字は彦先、吳の人なり。尚書郎と為る。鈔に曰く、機は洗馬より吳王の郎中令と為り、郎中より又た尚書郎と為る。彦先も亦た尚書郎為りて、共に楚省の別院に在り。榮は復

た是れ機の姉の夫なり。時に于いて雨に遇ひ相ひ見ふを得ざれば、相ひ憶ひて此の詩を作る。

すなわち、李善は王隱の『晋書』を引いて顧榮が尚書郎であったことを説明するだけであるが、鈔に拠れば、顧榮の妻は陸機の姉ということになる。邱燦錫氏によれば、鈔の注釈の性格として李善注を補ったり、別の解釈を示す場合があるということであるが、果たして鈔は何を根拠にしてこのような見解を示したのであるうか。『宋書』に見えるものとは異なつた指摘をしている。

それでは、陸機の姉の夫は顧謙なのか、それとも顧榮なのか。ここで気になるのが顧謙と顧榮との関係である。両者の関係を示す資料として、『晋書』卷六十八・顧榮伝には次のようにある。

時南土之士、未_レ尽才用。榮又言、「陸士光、貞正清貴、金玉其質。甘季思、忠款尽誠、膽幹殊快。殷慶元、質略有明規、文武可施用。榮族兄公讓、明亮守節、困不易操。会稽楊彦明・謝行言、皆服膺儒教、足為公望。賀生沈潜、青雲之士。陶恭兄弟、才幹雖少、実事極佳。凡此諸人、皆南金也」。書奏、皆納之。

時に南土の士、未だ_レ尽くは才として用ひられず。榮は又た言ふ、「陸士光は、貞正 清貴にして、其の質

を金玉にす。甘季思は、忠款 誠を尽くし、膽幹 殊に快なり。殷慶元は、質略にして明規有り、文武 施用す可し。榮の族兄の公讓は、明亮にして節を守り、困まりても操を易へず。会稽の楊彦明・謝行言は、皆な儒教を服膺し、公望と為すに足る。賀生は沈潜するも、青雲の士なり。陶恭兄弟は、才幹 少なりと雖も、実事は極めて佳なり。凡そ此の諸人は、皆な南金なり」と。書奏するに、皆な之を納る。

ここに「榮族兄公讓」とあることから、顧謙（字は公讓）は顧榮の族兄であることが分かる。因みに汪藻『世説叙録』の「呉国呉郡顧氏譜」には、顧榮の別族として顧謙の名が見え、次のようにある。

【三世】

彦、弟子。

禮、弟子。

謙、弟子。字公讓。晋平原内史。

秘、弟子。交州刺史。

ところで、ここに名の見える顧秘であるが、陸機には「贈顧交趾公真一首」という詩があり、その題下の李善注に引く『晋百官名』には「交州刺史顧秘、字公真」とある。そうであるならば、顧秘は陸機とも交際のあった人ということになり、陸機は顧氏の多くの人と交流を持っていたのであろう。

たのであろう。

さて、以上の資料によって陸機の姉の存在が確認できたが、陸機・陸雲の作品の中にも姉の存在を窺わせる幾つかの資料がある。例えば陸機の「愍思賦」がそれである。此の賦には次のような序が附せられている。

予屢抱孔懷之痛、而奄復喪同生姉。銜恤哀傷、一載之間、而喪制便過。故作此賦、以紓慘惻之感。

予は屢ば孔懷の痛みを懐き、而も奄ち復た同生の姉を喪ふ。恤ひを銜みて 哀傷し、一載の間にして、喪制 便ち過ぐ。故に此の賦を作り、以て慘惻の感ひを紓す。

ここで「孔懷之痛」というのは、兄弟の死を言うが、この序によって陸機に姉がいて、その姉が亡くなったということが分かる。次に賦の本文を見てみよう。

時方至其倏忽、歳既去其晼晚。楽来日之有継、傷頽年之莫纂。覽萬物以澄念、怨伯姉之已遠。尋遺塵之思長、瞻日月之何短。升降乎階際、顧盼兮屏營。雲承字兮藹藹、風入室兮泠泠。僕従為我悲、孤鳥為我鳴。

時は方に至ること其れ倏忽たり、歳も既に去ること其れ晼晚たり。来日の継ぐ有るを楽しむも、頽年の纂ぐ

莫きを傷む。萬物を覽て以て念おもひを澄ませ、伯姉の己に遠きを怨む。遺塵を尋ねては之れ思ひは長く、日月を瞻ては之れ何ぞ短き。階際に升降しては、顧盼して屏營す。雲は宇を承けて藹藹たり、風は室に入りて冷冷たり。僕従は我が為に悲しみ、孤鳥は我が為に鳴く。

ここに「覽萬物以澄念、怨伯姉之已遠」と「伯姉」の語が見えることから、或いは他にも女の兄弟があつたのかも知れないが、此の姉が一番上の姉であることも分かる。また、次に挙げるのは陸雲の「歳暮賦」の序である。

余祇役京邑、載離永久。永寧二年春、忝寵北郡、其夏又轉大將軍右司馬於鄴都。自去故郷、荏苒六年、惟姑與姉、仍見背棄。銜痛萬里、哀思傷毒。而日月逝速、歳聿云暮。感萬物之既改、瞻天地而傷懷、乃作賦以言情焉。

余は役を京邑に祇つしみ、載すなはち離ること永く久し。永寧二年の春、忝くも北郡を寵めくまれ、其の夏 又大將軍の右司馬に鄴都に轉ず。故郷を去りて自り、荏苒として六年、惟ただふに姑と姉とは、仍りに背棄せらる。痛みを萬里に銜くはみ、哀思 傷毒す。而も日月の逝くこと速かに、歳は聿つひに云いに暮る。萬物の既に改まるに感じ、天地を瞻て懷おもひを傷ましめ、乃ち賦を作りて以て情を言ふ。

ここには「自去故郷、荏苒六年、惟姑與姉、仍見背棄」とあり、また賦の本文にも、

問仁姑而背世兮、及伯姉而淪喪。
仁姑を問ふに世に背かれ、伯姉に及ぶに淪喪せらる。

と、陸機の賦と同じような表現が見られる。

更に『顔氏家訓』文章篇には、わずかに「倪天之和」（天の和に倪たふ）という一句のみであるが、陸機の「姉誄」が引かれており、これも陸機に姉がいたことの傍証になる資料である。

以上の資料によつて、陸機の姉の存在を確認することができた。ただ、その姉が「文選鈔」に指摘するように顧榮に嫁いだのか、或いは『宋書』に言うように顧謙に嫁いだのか、ということについては、やはり判断としない。この点については、引き続き考察してゆきたい。

三 陸機の兄について

陸機の兄については、『吳志』卷十三・陸遜伝に附す陸抗伝に次のようにある。

秋遂卒。子晏嗣。晏及弟景・玄・機・雲、分領抗兵。晏為裨將軍、夷道監。天紀四年、晋軍伐吳、龍驤將

軍王濬順流東下、所至輒克、終如抗慮。景字士仁、以尚公主拜騎都尉、封毗陵侯。既領抗兵、拜偏將軍、中夏督。澡身好學、著書數十篇也。二月壬戌、晏為王濬別軍所殺。癸亥、景亦遇害。時年三十一。

秋、遂に卒す。子の晏 嗣ぐ。晏及び弟の景・玄・機・雲は、抗の兵を分領す。晏は裨將軍・夷道の監と為る。天紀四年、晋軍は呉を伐ち、龍驤將軍の王濬は、流れに順ひて東下し、至る所は輒ち克ち、終に抗の慮ふるが如し。景、字は士仁、公主を尙るを以て騎都尉に拜せられ、毗陵侯に封ぜらる。既に抗の兵を領するや、偏將軍・中夏の督に拜せらる。身を澡め學を好み、書數十篇を著はすなり。二月壬戌、晏は王濬の別軍の殺す所と為る。癸亥、景も亦た害に遇ふ。時に年三十一。

「秋、遂に卒す」とあるが、これは呉の鳳皇三年（二七四）のことである。父の陸抗が亡くなった後、その兵を晏・景・玄・機・雲の五子が分領した。しかし、六年後の天紀四年（二八〇）、晋軍は呉を伐ち、龍驤將軍王濬の率いる軍に敗れ、晏・景は戦死したのであった。この事は、『吳志』卷十二・虞翻伝の裴注にも、次のように見えている。

晋征呉、（虞）忠與夷道監陸晏、晏弟中夏督景、堅守不下、城潰被害。

晋、呉を征するや、忠は夷道の監陸晏、晏の弟中夏の

督景と、堅く守りて下らず、城は潰れて害せらる。

同様の内容の記事は、『晋書』卷三・武帝紀および卷四十二・王濬伝にも記されているが、史書にはこの他にその名を見ることはできない。

このように、陸機の兄の晏・景については、史書は詳しいことを伝えてくれないが、陸機の雲に与えた詩によって、そのあたりの事情を知ることができる。すなわち、陸機の「贈弟士龍」（弟の士龍に贈る）という全十章からなる詩である。此の詩には、次のような序が附されている。

余弱冠夙孤。與弟士龍、銜恤喪庭。続会逼王命、墨經從戎。時並繁髮、悼心告別。漸歴八載、家邦顛覆。凡厥同生、彫落殆半。収迹之日、感物興哀。而龍又先在西、時迫当祖載二昆。不容逍遙、銜痛東徂、遺情西慕。故作是詩、以寄其哀苦焉。

余は弱冠にして夙に孤たり。弟の士龍と與に、恤ひを喪庭に銜む。続いで王命に逼らるるに會ひ、墨經して戎に従へり。時に並びに繁髮し、心を悼めて別れを告ぐ。漸く八載を歴、家邦は顛覆す。凡そ厥の同生、彫落殆ど半ばなり。収迹の日、物に感じて哀しみを興す。而して龍は又た先に西に在れば、時に當に二昆を祖載すべきことを迫らる。逍遙するを容されず、痛

みを銜んで東に徂ぎ、情を遺して西を慕ふ。故に是の詩を作りて、以て其の哀苦を寄す。

ここに「漸く八載を歴、家邦は顛覆す」とあるが、陸機の父抗が亡くなったのは、呉の鳳皇三年（二七四）のことであるから、此の詩が作られたのは、二八二年、すなわち太康三年、呉国滅亡の二年後以降のことと思われる。陸機は戦死した二人の兄の柩を郷里に運ぶために、西に残る雲のことが気がかりであったようである。さて、全て十章から成る此の詩は、その第一章で陸氏の功業を称賛した後、続く第二章では、戦死した二人の兄（晏・景）について、次のように述べている。

篤生三昆 篤く三昆を生み
克明克俊 克く明にして克く俊なり
遵途結轍 途に遵ひて轍を結び
承風襲問 風を承けて問を襲ふ
帝曰欽哉 帝曰く 欽まんなかな
纂戎裂祚 戎が烈祚を纂げよと
雙組式帶 雙組 式て帯にし
綬章載路 綬章 路に載つ
即命荊楚 即ち荊楚に命ありて
対揚休顧 休顧を対揚す
肇敏厥績 敏なる厥の績を肇り
武功聿拳 武功は聿に拳がれり

煙燼芳素 煙燼の芳素
綢繆江澣 江澣に綢繆す
昊天不弔 昊天 弔まらず
胡寧棄予 胡寧ぞ 予を棄つるや

「敦厚なる徳を受けて生まれ、聡明であられた兄上は、天子の命によって荊州に向かい、その地で武勲を挙げられましたのに、しかるにどうして天は憐れむことなく、わたしを見捨ててしまわれたのか」と、兄を失った悲しみを詠じている。

続く第三章では、才能の無い自分が父の兵を授かって出陣したこと、第四章では呉国が敗れたことを詠い、第五章では弟雲への励まし、第六章では敗戦の悲しみを述べている。ここで、

自往迄茲 往より茲に迄るまで
曠年八祀 年を曠しくすること八祀なり

というのは、序に「漸く八載を歴、家邦は顛覆す」とあるのと同じく、父を失ってから八年の歳月が経過したことをいうものである。そうして、その八年の間の思いを第七章で述べ、第八章では家に帰る様子を述べている。第九章では、

昔我斯逝 昔 我 斯に逝くや

兄弟孔仁 兄弟 孔はなはだ仁いづくしめり
 今我来思 今 我 来たるや
 或凋或疚 或いは凋し 或いは疚す

と、「昔、出征したときには、兄弟みな揃っていつくしみあっていたのに、今、帰還するや、亡くなった者もあり 病む者もある」と、兄を失った思いを詠っている。呉国の滅亡、父の死、二人の兄の戦死と、悲哀に満ちた八年間の思いを述べたあと、終わりの第十章でその思いを結んでいる。

此の詩は、高橋和巳氏が入洛前の二陸の状況を知る貴重な資料であるとして早くに取り上げておられ、^⑤そこでは此の詩によって、『晋書』本伝に陸機は太康の末年に入洛した、とあるその前に、実は捕虜となっていたん洛陽に連行され、二人の兄の埋葬のために許されて呉に戻ってきたのだという説を出しておられる。それについては立命館大学の松本幸男氏が異を唱え、別の見解を提示しておられるが、^⑥今回は二陸のことには触れないでおくことにする。

さて、『藝文類聚』卷二十一・人部・友悌には、陸機の二兄の景が、長兄の晏に宛てた書翰が二通収められている。その内の一書の内容は次のごとくである。

向訣不知所言、追惟銜恨、恨結胸懷。懷此恋恨、何

時可言。望路則尚近、別已千里、其為思結、纏在心膺。於是離折、路人悲之。況此戚、兼之懿好。情之感咽、何時可勝。念兄始出、既当勞思。嚴寒向隆、經塗軼軻。既宜保德、為世作資。厚自珍愛。

向さきに訣わかれてより言ふ所を知らず、追惟しては恨みを銜くみ、恨みは胸懷に結ぼる。此の恋恨を懐きては、何れの時にか言ふ可けんや。路を望めば則ち尚ほ近きも、別れて已に千里なれば、其れ為に思ひは結ばれ、纏はりて心膺に在り。是に於いて離折し、路人 之を悲しまん。況んや此の戚に処り、兼ねて之れ懿好するをや。情の感咽する、何れの時にか勝たふ可けんや。念おもふに兄は始めて出で、既に当まさに勞思すべけん。嚴寒 隆たかなるに向かはば、經塗は軼軻ならん。既に宜しく徳を保ち、世の為に資と作すべし。厚く自ら珍愛せよ。

後半に「念ふに兄は始めて出で、既に当に勞思すべけん」とあることから見て、この手紙は、或いは長兄の晏が父抗の死後、その兵を分領して始めて故郷を離れた時のものと思われる。兄を思う心情がよく表れた内容の書翰である。

第二書は、次のようなものである。

自尋外役、出入三年。縁兄之篤睦、必時存之。寶録兄書、積之盈筥。不得新命、無以自慰。時輒温故、以釋其思。有信勿忘数字。每見手迹、如復暫会。

尋いで外役して自り、出入すること三年なり。兄の篤睦に縁り、必ず時に之を存す。兄の書を寶録し、之を積みて筥に盈てり。新命を得ざれば、以て自ら慰むる無し。時に輒ち故きを温め、以て其の思ひを釋かん。信有らば数字を忘るること勿かれ。手迹を見る毎に、復た暫く会するが如し。

ここでは、やがて自分も故郷を離れることになったが、兄からの手紙だけが頼りであると言ひ、兄に対する弟の思ひを見て取ることが出来る。ちなみに終わりの「有信勿忘数字」という「信」は、東晋の王羲之の書簡にもよく見られる語で、使者のことをいい、手紙などを運んでいた者のことを言うが、西晋の時代においても既にそのような人がいたことを窺わせ、その点においても此の書翰は興味深い資料である。

ところで、三番目の兄の玄であるが、この人については、陸機に「吳貞獻処士陸君誄」があり、その中で、

人皆年長、君独短祚。
人は皆年長、君は独り短祚たり。

とあるように、若くして亡くなったようである。

四 陸機の弟について

陸機の末弟の「耽」であるが、『晋書』では陸雲伝の後に伝が附されている。

雲弟耽、為平東祭酒、亦有清誉、與雲同遇害。大將軍參軍孫惠、與淮南内史朱誕書曰、「不意三陸、相携闔朝、一旦湮滅、道業淪喪。痛酷之深、荼毒難言。國喪僞望、悲豈一人」。其為州里所痛悼如此。

雲の弟は耽、平東の祭酒と為り、亦た清誉有るも、雲と同じ害に遇ふ。大將軍の參軍の孫惠は、淮南内史の朱誕に書を與へて曰く、「意はざりき 三陸、闔朝に相ひ携へ、一旦にして湮滅し、道業 淪喪せんとは。痛酷の深きこと、荼毒 言ひ難し。國 僞望を喪へり、悲しみは豈に一人のみならんや」と。其の州里の痛悼する所と為ること此くの如し。

ここでは「三陸」と、機・雲・耽の兄弟を表現しているが、これは次に挙げる『機雲別伝』（『吳志』卷十三・陸遜伝所引裴松之注）に、陸機の配下であった孟玖や牽秀らの讒言を信じた司馬穎が、

穎信之、遣收機。并收雲及弟耽、並伏法。

穎は之を信じ、機を収へしむ。并せて雲及び弟の耽を収へ、並びに法に伏す。

と、陸機・陸雲・陸耽の三兄弟を捕らえて処刑してしまつたところ、『晋書』にある孫恵から朱誕への書翰がここに見え、

孫恵與朱誕書曰、「馬援扞君、凡人所聞。不意三陸、相携暴朝、殺身傷名。可為悼歎」。事亦並在『晋書』。孫恵は朱誕に書を與へて曰く、「馬援の君を扞えらぶは、凡そ人の聞く所なり。意はざりき。三陸、暴朝に相ひ携へて、身を殺し名を傷つけられんとは。為に悼み歎く可し」と。事は亦た並びに『晋書』に在り。

とあるのに拠るものである。尚お終わりに、これらのことは『晋書』に見えるというのは、勿論、いわゆる王隱の『晋書』などの古晋書のことを言うものである。

ここに挙げた資料の他に、末弟の「耽」に関わるものを未だ見つけていないが、機・雲とともに捕らえられ処刑された時には「三陸」と称されていることから見ると「機・雲」との年齢差はあまり無いように思われる。また、父の抗が亡くなった時に、「晏・景・玄・機・雲」の五子はその兵を分領したといい、そこには「耽」の名が見えないが、時に陸機は十四歳、一つ違いの雲は十三歳であるから、「耽」の年齢は当然それ以下ということになり、父の兵を領するには未だ年齢が幼かったためであつたのであろう。

五 おわりに

以上、今回は、「陸機の兄弟について」ということで検討を進めてきたが、これらのことは言うまでもなく文学研究をするための一連の作業である。勿論、文学作品としての詩文を取り上げて、それを研究することは当然のことであるが、そうした作品が、どのような環境で生まれたのか、作者を取り巻く様々な事象を分析・整理していくことは、作品を理解する上で、先ず成されなければならぬことだと思われる。そのためには、資料の収集、そうして集めた資料を読まなければならず、時間が相当にかかるけれども、そうした基礎作業を少しずつ進めていかなければならないと考えている。次の機会には、そうした成果をふまえて陸機文学の特質を少しでも報告できればと思う。

(注)

- ① 姜亮夫『陸平原年譜』陸氏世系表の注に「機同盟中有姉。宋書卷八十一顧覲之伝、顧謙字公讓、吳郡人、陸機姉夫」とある。
- ② 『南史』卷三十五の顧覲伝も同じ。
- ③ 富永一登・衣川賢次「新出『文選』集注本残卷校記」(『中国中世文学研究』第三十六号)を参照。

- ④ 邱榮鑄「文選集注所引文選鈔について」（『小尾博士退休記念中国文学論集』第一学習社）を参照。
- ⑤ 『毛詩』小雅・常棣に「死喪之威、兄弟孔懷」（死喪の威れ、兄弟 孔だ懷ふ）とある。
- ⑥ 『毛詩』邶風・泉水に「问我諸姑、遂及伯姉」（我が諸姑を問ひ、遂に伯姉に及ばん）とある。
- ⑦ 『顔氏家訓』文章篇では、陸機の「姉誅」の此の句を取り上げ、これは『毛詩』大雅・大明に「大邦有子、倪天之妹」（大邦に子有り、天の妹に倪ふ）とあるのに倣った表現であるが、自分の姉にこうした表現を用いるのは適切ではないと、批評している。
- ⑧ 高橋和巳「陸機の伝記とその文学（上）」（『中国文学報』第十一冊）を参照。
- ⑨ 松本幸男「陸機兄弟の四言贈答詩について」（『立命館文学』第五一一号）を参照。
- ⑩ 森野繁夫・佐藤利行『王羲之全書翰』（白帝社）を参照。